



TITLE:

ムニャ語の自他動詞と使役構文

AUTHOR(S):

池田, 巧

CITATION:

池田, 巧. ムニャ語の自他動詞と使役構文. シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相 2019: 115-134

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245169>

RIGHT:

ムニャ語の自他動詞と使役構文*

池田 巧

ムニャ語の概要

ムニャ語 (Mu-nya language; 木雅語; *Mi nyag skad*) は、中国四川省甘孜藏族自治州の康定県から九龍県にかけて居住するチベット人の一部が話していることばで、書記体系をもたない。話し手の人口は、中国の資料では約1万人という推計があるが、実際のところは不明である。話し手の族称はチベット族 (藏族;



地図1 九龍縣の位置
バルーンは湯古村を示す。

* 本稿は、2014年1月24日(日)に京都大学人文科学研究所で開催されたTB+ (プラス) 研究会での「ムニャ語の自他動詞と使役構文」の報告に基づく。研究会メンバーによる議論とコメントを反映させた改訂版を、Causative Constructions in the Mu-nya Language というタイトルで The 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics: 2015/8/20-23 at University of California, Santa Barbara にて発表した。英語版の作成にあたっては、James A. Matisoff 教授から懇切なる御指摘と御指導をいただき、また報告後には Bernard Comrie 教授からもコメントを賜った。併せて謝意を表したい。本稿は日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 (A) 23242019 羌系諸語の歴史と西夏語の位置づけに関する実証的研究 (代表: 池田 巧) による研究成果の一部である。

[pu³³pa⁵⁵] < Tib. *bod pa*) だが、他地域のチベット人と区別して自らを [muw³³na⁵⁵vu³³] cf. Tib. *Mi nyag ba* と呼ぶ。この族称が歴史上の西夏を建国した主要民族名 *Mi nyag* と一致することから、その系統関係が注目されてきた。

ムニャ語を話すチベット人の若い世代では漢語の四川方言、中年以上の世代ではチベット語カム方言も話す人が多い。今日では漢語からの影響が圧倒的ではあるけれども、ムニャ語に定着している借用語のほとんどはチベット語からのものである。ムニャ語を話す人々の社会背景と研究史については、IKEDA (2007) に詳述した。文法の概要は黄布凡 (1985: 1991: 2007: 2009 [修訂版]) および池田巧 (2010/2013/2016) を参照されたい。

1. はじめに

チベット＝ビルマ語のなかでも川西民族走廊に分布する羌語支 (Qiangic Branch) には、類型特徴のひとつとして動詞の形態論における〈使動範疇〉が提唱されている。しかしこの〈使動範疇〉は、しばしば構文の分析をせずに動詞の形態のみに注目して分類しており、その結果、ともすれば自他動詞の対応の分析では自動詞文の主語と他動詞文の目的語との関係についての整理が不十分であったり、〈使動〉という概念のなかで使役 (Causative) と他動 (Transitive) とが区別されずに論じられていたりもする。

ムニャ語については、孫 (1983) が、ムニャ語には〈自動態〉と〈使動態〉があるとして、8つの動詞について鼻冠濁音声母と同部位の清音声母の交替形を示したことを受けて、黄 (1991) ではさらに、1) 動詞の方向接辞の母音交替、2) 動詞語幹の頭子音の鼻冠濁音と清音の交替、3) 自動態動詞に *te^ha* (使) を加えて使動態とする、という3種類の表現形式があることを指摘した。このうち2)は、孫 (1983) の報告例に相当するものであるが、数は少なく、古ムニャ語からの残存形式ではないかと推測している。1) と3) の形式については、孫 (1983) では言及がない。

黄 (1991) は、3) は分析型で、比較的新しく起こった表現形式であろうと推測する。たしかにいくつかの自動詞については、助動詞 */=te^hu³³/* (黄: *te^ha*) をつけることであたかも他動詞のように使われる場合もあるが、実際にはその数は多くない。助動詞 */=te^hu³³/* は自由度が高く、自動詞のみならずさまざまな他動詞にも接続して使役構文を形成する。したがって自動詞に */=te^hu³³/* のついた動詞句部分のみを取り出して〈使動態〉の表現形式のひとつとして扱うのは、分析が不十分であると言わざるを得ない。

本稿では、ムニャ語の自動詞文／他動詞文／使役文を並べて対照しながら、動詞の自他対応と構文との関係をより詳しく分析する。あわせてムニャ語と接触関係にあった他のチベット＝ビルマ語と比較対照することで、ムニャ語の使役構文の歴史的発展についても検討したい。

2. 自動詞と他動詞

2.1. 文の基本構造：能格型

ムニャ語は能格型の言語である。他動詞文の主語 (Agent) は能格助詞の /=*ji*³³/ で標示されるが, 自動詞文の主語 (Subject) と他動詞文の目的語 (Patient) はいずれも無標 (absolutive) である。ここではまず典型的な「切れる」(自動詞 [*vi*]) と「切る」(他動詞 [*vt*]) のペアを例に, ムニャ語の基本構文について紹介する。

自動詞	他動詞
/nẽ ³³ - ndzwe ⁵⁵ / [+voiced]	/nẽ ³³ - ntɕ ^h we ⁵⁵ / [-voiced]
切れる	切る

ムニャ語のこのふたつの動詞は派生関係にある。どちらが基本形なのかは判定し難いが, 語幹の頭子音の有声 [*vi*] / 無声 [*vt*] により区別される。動詞前接辞の {*ne*³³-} は動作の方向を表わし, ここでは下向きの方向を示している。一部の存在動詞などを除くと, ムニャ語の動詞の基本形は [方向接辞-語幹] (DIR-√STEM) の構成である¹。

- (1) we⁵⁵ nẽ³³- ndzwe⁵⁵ ɪɑ³³.
 ロープ DIR- 切れる DEC: 完了
 ロープが切れた。

この自動詞文の主語 (Subject) /we⁵⁵/ 「ロープ」は無標である。/ɪɑ³³/ は述詞 (Declarative) で, 無意志動詞のあとについて完了を表わすとともに, 話し手の3段階の確認性: [伝聞/熟知/確認] のうちの [+確認] を示している²。

- (2) ɲi⁵⁵ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ ɲe³³.
 1sg.[ERG] ロープ DIR- 切る DEC
 私がロープを切った。

この文の主語 (Agent) の /ɲi⁵⁵/ は, 第一人称単数の人称代名詞 /ɲw⁵⁵/ 1sg. 「わたし」に能格助詞 /=*ji*³³/ がついた形である。この他動詞文においては, 目的語 (Patient) の /we⁵⁵/ <ロープ>は無標であり, 自動詞文の主語 (Subject) と同じ

¹ ムニャ語の動詞には8種類の方向前接辞がある。

1. { <i>tu</i> ³³ -} 「上へ」	5. { <i>ngu</i> ³³ -} 「話し手に向かって」
2. { <i>ne</i> ³³ -} 「下へ」	6. { <i>te</i> ³³ -} 「話し手から離れて」
3. { <i>yw</i> ³³ -} 「上流へ」	7. { <i>rw</i> ³³ -} 「回って」
4. { <i>fia</i> ³³ -} 「下流へ」	8. { <i>q^hw</i> ³³ -} 「方向性なし」

² ムニャ語の述詞 (DEC) とその確認性については, 池田 巧 (2013) の分析を参照。

扱いとなっている。/ŋe³³/は述詞で第一人称単数の主語による完了および確認性の [+熟知] を示している³。

2.2. 自動詞（有声子音）と他動詞（無声子音）の対

ムニャ語の動詞の中には、派生交替により有声頭子音の自動詞と無声頭子音の他動詞が対をなすものがある。

自動詞	他動詞
/fĩe ³³ - mbũ ³³ ndʒe ⁵⁵ / [+voiced] (結び目が) ほどける	/fĩe ³³ - pu ³³ tʃe ⁵⁵ / [-voiced] (結び目を) ほどく
/fĩã ³³ - ngo ⁵⁵ / [+voiced] ゆるむ	/fĩã ³³ - nqʰo ⁵⁵ / [-voiced] ゆるめる
/nẽ ³³ - nge ⁵⁵ / [+voiced] (棒や枝が) 折れる	/nẽ ³³ - qɑ ⁵⁵ / [-voiced] (棒や枝を) 折る
/nẽ ³³ - mba ⁵⁵ / [+voiced] こわれる	/nẽ ³³ - pʰɑ ⁵⁵ / [-voiced] こわす

3. 使役文

3.1. 使役文の構造

ムニャ語において、たとえば「私はロサン（チベット文語の綴り [WrT] では *bLo bzang*）にロープを切らせた。」のような典型的な使役文は、どのように表現されるのだろうか。ここでは、使役文において、使役主 (Causer) 被使役者 (Causee) 受動者 (Patient) のそれぞれの項が、文中でどのように標記〔マーク〕されるのかを見ておきたい。

- (3) ŋi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ = le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntʃ^hwe⁵⁵ = tʃ^hu³³ ŋe³³.
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS DEC
 私がロサンにロープを切らせた。

³ 同上。

この文は、使役主 (Causer=Agent) 被使役者 (Causee) 受動者 (Patient) から構成される典型的な使役文である。使役主 (Causer=Agent) には能格 (ERG) 助詞がつき (/ɲi⁵⁵/ < /ɲw⁵⁵=ji³³/), 被使役者 (Causee) は与格 (DAT) の助詞で標記〔マーク〕されている。文法事象として注目されるのは、能格助詞が付いてマークされる項は、ムニャ語においては、[実際の動作者である] 被使役者 (Causee) ではなく、[行為を起こした] 使役主 (Causer=Agent) のほうである。受動者 (Patient) であるロープ〔他動詞の目的語〕は無標であり、動詞のあとには使役助動詞の /=tɕ^hw³³/ がついている。

以上の分析から、ムニャ語の使役構文は、以下のように定式化できる。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	方向 - 動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	DIR- √V =CAUS	DEC

3.2. 使役文の否定

「私はロサンにロープを切らせなかった。」のような使役文の否定は、以下のよう表現される。否定のしかたにはいくつかのタイプがある。

- (4) ɲi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 me³³- vuw⁵⁵.
 NEG- する

私はロサンにロープを切らせなかった。[過去=完了]

- (5) a. ɲi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 nɯ³³- vuw⁵⁵.
 NEG- する

- b. ɲi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ =le³³ we⁵⁵ nẽ³³- ntɕ^hwe⁵⁵ =tɕ^hw³³
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT ロープ DIR- 切る =CAUS
 nɯ³³- =po⁵⁵.
 NEG- =SFX: 非完了

私はロサンにロープを切らせない。[現在=非完了]

使役構文の否定形は、使役助動詞 / $t\phi^{h\omega^{33}}$ / のあとに [否定辞 - 汎動詞] / $me^{33}-vu^{55}$ / <NEG [完了] - する>あるいは / $n\omega^{33}-vu^{55}$ / <NEG [非完了] - する>を置き、述詞はつけない。ムニャ語には2種類の動詞否定辞があり、/ me^{33} / は完了の文に、/ $n\omega^{33}$ / は非完了の文でそれぞれ使われる。あるいは非完了の場合には / $n\omega^{33}-po^{55}(\eta e^{33})$ / <NEG- SFX (DEC)> という述語表現を用いてもよい。動詞接尾辞 / po^{55} / + 述詞 / ηe^{33} / の組合せは、非完了相における第一人称主語の意志を示しており、否定文中では述詞の / ηe^{33} / は省略されることが多い。

第三人称主語の場合には、もうひとつ異なる否定表現がある。使役助動詞を反復して否定する / $V=t\phi^{h\omega^{33}} n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}}$ / という形式である。

- (6) $ve^{33}ve^{55}=ji^{33}$ $\eta e^{55}=le^{33}$ $ti\tilde{e}^{55}\eta^{33}$ $k^{h\omega^{33}}-t\phi^{h\omega^{55}}.i^{33}=t\phi^{h\omega^{33}}$
 父さん =ERG 1sg. =DAT テレビ DIR- 見る =CAUS
 $n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}}$ ti^{33} .
 NEG: 非完了 =CAUS DEC

父さんはボクにテレビを見させてくれない。

さらに使役助動詞を反復することなく述詞のみを否定する / $n\omega^{33}-ti^{55}$ / という否定表現もあるが、これは述詞を伴う平叙文の否定と同じ形式である。しかし動詞の後につく使役助動詞を直接否定することはできない。*/ $k^{h\omega^{33}}-t\phi^{h\omega^{55}}.i^{33} n\omega^{33}-t\phi^{h\omega^{55}} ti^{33}$ / は、文法的に誤りである。以上をまとめると、否定は常に述部において表現され、使役文中においては、動詞あるいは使役助動詞を直接否定することができないということになる。

4. 独立自動詞文

4.1. 非人称主語 / 受動者 [物]

ムニャ語の動詞のなかには、対応する他動詞をもたない独立自動詞がいくつかある。ここでは、独立自動詞の例として、「満ちる」を取り上げ、自動詞文、他動詞文、使役文を比較してみたい。

- (7) $t\phi^{55}$ $t\phi^{33}-su^{55}$ ia^{33} .
 水 DIR- 満ちる DEC
 水が満ちた。[自動詞文]

ムニャ語の / $t\phi^{33}-su^{55}$ / 「満ちる」は自動詞で、対応する他動詞の「満たす」に相当する単語はない。それゆえこの自動詞 / $t\phi^{33}-su^{55}$ / を用いて「誰かが（何

かを) (何かで) 満たす」といった他動詞的な意味内容を伝えるには、ムニャ語では以下のような構文を使う。

- (8) ηi^{55} $t\epsilon u^{55}$ $t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55}$ = $t\epsilon^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 DIR- 満つ =CAUS DEC
 [使役主 [能格] 目的語 (無標) DIR- 動詞 = 助動詞 述詞]
 私が水を満ちさせた。(=私が水を満たした。)[他動文]

この場合、他動性は被使役者 (Causee) のない使役構造を用いて表現される。ムニャ語の使役構文においては、被使役者 (Causee) は与格助詞の $/=le^{33}/$ を後置して標示する。よってこの文の主語は使役主であり、能格助詞の $/=ji^{33}/$ で標示 [マーク] されるとともに、自動詞に使役助詞の $/=t\epsilon^h u^{33}/$ を付けることで他動性が示されている (が、ここでは「使役」ではない)。

この文と「私がロサンに水を満たさせた。」という典型的な使役文を比較してみたい。「誰かに～させる」という使役の主体が、動作者とは別にいる場合、動作の実行者のほうは、能格ではなく与格で表現する。この使役文においては、ロサンは (実際に水を満たす動作者ではあるが) 被使役者 (Causee) なので、能格助詞ではなく、与格助詞の $/=le^{33}/$ によって標示されることになる。能格を取るのは、使役主 (動作をさせる主語) のほうである。

- (9) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55} = le^{33}$ $t\epsilon u^{55}$ $t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55}$ = $t\epsilon^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 水 DIR- 満つ =CAUS DEC
 [使役主 [能格] 被使役者 = 与格 目的語 (無標) DIR- 動詞 = 助動詞 述詞]
 私がロサンに水を満たさせた。[使役文]

自動詞文の場合、動詞の動作主体は、動詞の直前にある無標の名詞 (つまり自動詞文の主語) と考えるべきであるが、他動詞文の目的語もやはり無標であることに注意を払う必要がある。

もし $/t\epsilon u^{55}/$ 「水」が他動詞句 $/t\bar{o}^{33}-s\bar{u}^{55} = t\epsilon^h u^{33}/$ 「満ちさせる」 > 「満たす」の目的語と考えるなら、この VtP にさらに使役の助動詞 $/=t\epsilon^h u^{33}/$ が二重につくのではないかとも思えるが、そうはならない (非文)。

4.2. 人称主語 / 受動者 [人]

派生他動詞 (形) をもたない同様の独立自動詞には、「沸く」「笑う」「泣く」などがある。主語が人の場合、これらの動詞を他動詞化するにはすこし複雑な手段が必要となる。

- (10) (?e⁵⁵tsu³³) za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ ɿa³³.
 (この) 子供 DIR- 笑 DEC

(この) 子が笑った。

- (11) ?e⁵⁵tsi³³ za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ =tɕ^hu³³ ɿa³³.
 3sg.[ERG] 子供 DIR- 笑 =CAUS DEC

彼が子供を笑わせた。

例文 (10) では、/za⁵⁵/「子供」は明らかに自動詞 /ni³³-ji⁵⁵/「笑う」の主語である。例文 (11) においても、/za⁵⁵/「子供」は依然として自動詞 /ni³³-ji⁵⁵/「笑う」の主語であって、/ni³³-ji⁵⁵=tɕ^hu³³/が*「(何かを) 笑う」という他動性フレーズとして振舞っていて、その目的語となっているわけではない。それゆえ /vi]=tɕ^hu³³/を、他動性を構築する文法フレームとして機械的に抽出するのは正しくないことがわかる。

ムニャ語で「誰かを笑う」を表現する場合、自動詞をそのまま用いたうえで、笑われる対象つまり受動者 (Patient) は、与格の助詞 /le³³/で示し、/ly⁵⁵za³³=le³³ ni³³-ji⁵⁵/「ロサンを笑う」のように表現する。その結果、使役文においては、被使役者 (Causee) も受動者 (Patient) も、ともに与格 (DAT) の助詞で示されることになる。

- (12) ni⁵⁵ ?e⁵⁵tsu³³=le³³ za⁵⁵=le³³ ni³³-ji⁵⁵ =tɕ^hu³³ ɿe³³.
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT 子供=DAT DIR- 笑う =CAUS DEC

私は彼に子供に笑いかけさせた。[笑ったのは彼]

- (13) ni⁵⁵ ?e⁵⁵tsu³³=le³³ za⁵⁵ ni³³-ji⁵⁵ =tɕ^hu³³ ɿe³³.
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT 子供 DIR- 笑う =CAUS DEC

私が彼に子供を笑わせた。[笑ったのは子供]

(12) (13) はいずれも作例であるが、発話協力者によれば、いずれも文法的には正しいけれども、解りにくいので、ほとんど使わない表現であるという。このほかムニャ語の動詞 /te³³-nge⁵⁵/「泣く」も、同じような文法的振舞いをする。

- (14) ?e⁵⁵tsu³³ te³³-nge⁵⁵ ɿa³³.
 3sg. DIR- 泣く DEC

彼が泣いた。

- (15) ηi^{55} $?e^{55}tsu^{33}$ $te^{33}-nge^{55}$ $=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg. DIR- 泣く =CAUS DEC

私が彼 / 女を泣かせた。[泣いたのは彼 / 女]

- (16) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $?e^{55}tsu^{33}$ $te^{33}-nge^{55}$ $=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang*=DAT 3sg. DIR- 泣く =CAUS DEC

私がロサンに彼 / 女を泣かさせた。[泣いたのは彼 / 女]

ただし、次の作例 (17) は、文法的には非文ではないけれども、想定される状況がわからないので使われない表現だとのことである。

- (17) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $?e^{55}tsu^{33}=le^{33}$ $te^{33}-nge^{55}=t\phi^{h}u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang*=DAT 3sg.=DAT DIR- 泣く =CAUS DEC

? 私はロサンに彼女のために泣いてもらった。[泣いたのはロサン]

5. 独立他動詞文

自動詞文の主語と他動詞文の目的語（受動者）がともに無標の絶対格であるとはいっても、典型的な他動詞である / $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ /「食べる」、/ $f\tilde{a}^{33}-t\phi^{h}u^{55}$ /「飲む」、/ $t\phi^{33}-z\phi^{55}$ /「持参する」などは、目的語である受動者をそのまま主語にして自動詞文を自動的に生成することはできない。たとえば / $k^{h}u^{33}t\phi e^{55} f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ / は *「蒸餃子が食べる」ではなく「蒸餃子を食べる」であるし、/ $wi^{55} f\tilde{a}^{33}-t\phi^{h}u^{55}$ / は *「酒が飲む」ではなく「酒を飲む」、/ $\phi oo^{33}to^{55} t\phi^{33}-z\phi^{55}$ / は *「傘が持参する」ではなく「傘を持参する」である。

- (18) $(?e^{55}tsu^{33})$ $za^{55}=ji^{33}$ $k^{h}u^{33}t\phi e^{55}$ $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}$ ja^{33} .
 (この) 子供 =ERG 蒸餃子 DIR- 食べる DEC

(この) 子が蒸餃子を食べた。

- (19) $?e^{55}me^{55}=ji^{33}$ $za^{55}=le^{33}$ $k^{h}u^{33}t\phi e^{55}$ $f\tilde{a}^{33}-ndzu^{55}=t\phi^{h}u^{33}$ ja^{33} .
 お母さん =ERG 子供 =ERG 蒸餃子 DIR- 食べる =CAUS DEC

母が子供に蒸餃子を食べさせた。

- (20) ηi^{55} $\zeta oo^{33} to^{55}$ $t\emptyset^{33} - z\emptyset^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 傘 DIR- 携帯 DEC

私は傘を持ってきた。

- (21) $ve^{55} ve^{55} = ji^{33}$ $k^h wi^{55} = le^{33}$ $\zeta oo^{33} to^{55}$ $t\emptyset^{33} - z\emptyset^{55} = t\zeta^h w^{33}$ ja^{33} .
 お父さん=ERG 弟=DAT 傘 DIR- 携帯=CAUS DEC

父が弟に傘を持たせた。

6. 語幹の母音交替による自他動詞の区別

自動詞と他動詞が母音交替によって形態的に区別される動詞がある。交替する母音は、方向接辞のみ、語幹のみ、あるいは方向接辞と語幹の両方に見られる場合がある。ここでは母音交替が動詞語幹に現れるタイプを取り上げる。

6.1. 母音交替が動詞語幹に現れる例

$/\underline{h}e^{33} - \underline{ju}^{55}/$ 「回る」と $/\underline{h}e^{33} - \underline{je}^{55}/$ 「回す」は、語幹の母音交替により自他動詞を区別する典型的な動詞のペアである。

自動詞	他動詞
$/\underline{h}e^{33} - \underline{ju}^{55}/$	$/\underline{h}e^{33} - \underline{je}^{55}/$ [+ tense]
回る	回す

- (22) $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33} - \underline{ju}^{55}$ $= pi^{33}$.
 マニ車 DIR- 回る =SFX
 マニ車が回る。

- (23) ηi^{55} $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33} - \underline{je}^{55}$ $= po^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] マニ車 DIR- 回す =SFX DEC
 私がマニ車を回す。

- (24) ηi^{55} $?e^{55} tsu^{33} = le^{33}$ $me^{33} ni^{55} k^h o^{33} lu^{55}$ $\underline{h}e^{33} - \underline{je}^{55} = t\zeta^h w^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg.=DAT マニ車 DIR- 回す=CAUS DEC
 私が彼にマニ車を回させる。

例文 (22) と (23) を比べてみるとわかるように、動詞語幹の母音交替が、自動詞と他動詞を区別する形態論的な手段となっている。例文 (24) の使役構文においてもこの母音交替が現れる。それは使役構文中の被使役者に「マニ車を回す」ことをさせるわけだから、嵌め込まれた他動詞句は当然、他動詞文と同じ構造になっている。

6.2. 母音交替が動詞語幹と前接辞に現れる例

動詞「沈む／沈める」は、自動詞と他動詞がやはり母音交替による派生関係にあり、母音交替は動詞語幹と方向前接辞の両方に現れる。

自動詞	他動詞
/nẽ ³³ - ndzũ ⁵⁵ /	/nõ ³³ - ndzo ⁵⁵ /
沈む	沈める

- (25) ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³ nẽ³³- ndzũ⁵⁵ ɪɑ³³.
 材木 水 = 中 DIR- 沈む DEC
 材木は水に沈んだ。

- (26) ŋi⁵⁵ ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³ nõ³³- ndzo⁵⁵ ŋe³³.
 1sg.[ERG] 材木 水 = 中 DIR- 沈め DEC
 私が材木を水に沈めた。

- (27) ŋi⁵⁵ ʔe⁵⁵tsũ³³ =le³³ ts^hu³³ru⁵⁵ tɕũ⁵⁵=qo³³
 1sg.[ERG] 3sg. =DAT 材木 水 = 中
 nõ³³- ndzo⁵⁵=tɕ^hũ³³ ŋe³³.
 DIR- 沈め =CAUS DEC
 私が彼に材木を水に沈めさせた。

方向接辞に形態論的機能を反映した母音交替が起こるのは、基本的に非円唇高母音に限られる（次節を参照）。他動詞 /nõ³³- ndzo⁵⁵/「沈める」は、この原則から外れているが、その理由は、この動詞の方向前接辞に見える母音交替は、動詞語幹の母音交替による同化の結果にすぎないからだと考えられる。

7. 方向前接辞の母音交替

他動詞のなかには、方向前接辞の母音交替によって自動詞を他動詞化したタイプのものがある。

自動詞

/tɛ³³-ɪa⁵⁵/

乾く

他動詞

/tɛ³³-ɪa⁵⁵/ [+tense]

乾かす

- (28) pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ =suw³³.

タオル DIR- 乾く =SFX

タオルが乾いた。

- (29) ɲi⁵⁵ pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] タオル DIR- 乾く DEC

私がタオルを乾かした。

- (30) ɲi⁵⁵ ʔɛ⁵⁵tsuw³³ =le³³ pɛɛ³³ɪe⁵⁵ tɛ³³-ɪa⁵⁵ =tɕ^huw³³ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] 3sg. =DAT タオル DIR- 乾く =CAUS DEC

私が彼にタオルを乾かさせた。

次の例も方向前接辞の母音交替による他動詞化であるが、もとの自動詞の文法的性質に起因して、他動詞としての自由度には制限がある。

自動詞

/t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵/

怖がる

他動詞

/t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵/

怖がらせる

- (31) ʔɛ⁵⁵tsuw³³ t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵ ɪa³³.

3sg. DIR- 怖がる DEC

彼 / 女は恐れた。

- (32) ɲi⁵⁵ ʔɛ⁵⁵tsuw³³ t^hɛ³³-q^hɛ⁵⁵ ɲɛ³³.

1sg.[ERG] 3sg. DIR- 怖がる DEC

私が彼 / 女を怖がらせた。

ただし例文 (32) に見える派生型他動詞 /t^he³³- q^he⁵⁵/「(誰かを) 怖がらせる／脅かす」は、使役文中では使うことができない。

- (33) * ηi^{55} $ly^{33}ze^{55} = le^{33}$ $?e^{55}tsur^{33}$ $t^he^{33}-q^he^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 3sg. DIR- 脅かす =CAUS DEC
 意図した意味：？私がロサンに彼／女を怖がらせた。

では、なぜこの派生型他動詞を使役文中で使うことができないのであろうか？その理由は、基本となる自動詞 /t^he³³- q^he⁵⁵/「怖がる」のまえに与格の助詞 /= le^{33} / のついた名詞が置かれると、恐れる対象を表わすからである。次の例文 (34) と比較されたい。

- (34) $?e^{55}tsur^{33}$ $ji^{55} = le^{33}$ $t^he^{33}-q^he^{55}$ $= pi^{33}$.
 3sg. お化け =DAT DIR- 怖い =SFX [非完了]
 彼／女はお化けがこわい。

次もやはり方向前接辞の母音交替による他動詞化の例であるが、おそらく一過性のもので、母音交替による形態論的な生産性の限界が観察できる。

自動詞	他動詞
/t ^h e ³³ - ku ⁵⁵ /	/t ^h i ³³ - ku ⁵⁵ /
凍る	凍らせる

- (35) $t\phi u^{55}$ $t^he^{33}-ku^{55}$ $= su^{33}$.
 水 DIR- 凍る =SFX [完了]
 水が凍った。

- (36) ηi^{55} ($?e^{55}tsur^{33}$) $t\phi u^{55}$ $t^he^{33}-ku^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] (この) 水 DIR- 凍る =CAUS DEC
 私が (この) 水を凍らせた。

ここでは自動詞 /t^he³³- ku⁵⁵/ に使役助詞 /= $t\phi^h u^{33}$ / のついたフレーズが、あたかも他動詞句のように使われており、この（迂言的）使役構造を借りた他動詞文においては、動詞の方向前接辞に他動詞化を示す母音交替が生じていないことに留意しておきたい。方向前接辞に母音交替が現れるのは、次のような使役文中においてである。

- (37) ηi^{55} $\eta e^{55}tsu^{33} = le^{33}$ $(\eta e^{55}tsu^{33})$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ku^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 3sg. =DAT (この) 水 DIR- 凍る =CAUS DEC
 私が彼 / 女に (この) 水を凍らさせた。

使役文においては、使役者と被使役者が明示されており、動詞の方向接辞にも母音交替が生じ形態的な他動詞化が行なわれていることに注意を払う必要がある。ムニャ語の話者によれば、使役文中で方向接辞に母音交替を生じていない自動詞形の $/t^h e^{33} - ku^{55}/$ を使うと非文になるとのこと。ここでは方向前接辞の母音交替がかろうじて形態論的生産性を有しているけれども、使役助動詞 $/=t\phi^h u^{33}/$ を省き、この他動詞形のみを使った他動詞文は成立しないという。

- (36) * ηi^{55} $(\eta e^{55}tsu^{33})$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ku^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] (この) 水 DIR- 凍る DEC
 意図した意味：？私がこの水を凍らせた。

このことから、使役助動詞 $/=t\phi^h u^{33}/$ の用法と生産性の拡大傾向が見て取れる。上述の例文 (32)「怖がらせる」と後述の例文 (39)「沸かす」を比較されたい。

自動詞	他動詞
$/t\phi u^{33} - ts^h u^{55}/$	$/t^h i^{33} - ts^h u^{55}/$
沸く	沸かす

- (38) $t\phi u^{55}$ $t\phi u^{33} - ts^h u^{55}$ ia^{33} .
 水 DIR- 沸く DEC
 お湯が沸いた。

- (39) a. ηi^{55} $t\phi u^{55}$ $t\phi u^{33} - ts^h u^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 DIR- 沸く =CAUS DEC
 b. ηi^{55} $t\phi u^{33}$ tse^{55} $t^h i^{33} - ts^h u^{55}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] 水 熱 DIR- 沸く DEC
 私が湯を沸かした。

- (40) ηi^{55} $tse^{33}ci^{55} = le^{33}$ $t\phi u^{55}$ $t^h i^{33} - ts^h u^{55}$ $= t\phi^h u^{33}$ ηe^{33} .
 1sg.[ERG] *bKra shis* =DAT 水 DIR- 沸く =CAUS DEC
 私がヂャシにお湯を沸かさせた。

動詞の「沸く」には2種類の他動詞化表現がある。(39) a. は自動詞にそのまま使役助動詞を付けた {[vi] = CAUS} を他動詞句のように使っており, (39) b. は方向接辞に母音交替を生じた /tᵢ³³- tsʰu⁵⁵/ を他動詞として使っている。そして使役構文の (40) 「誰かにお湯を沸かさせる」では, /tᵢ³³- tsʰu⁵⁵ = tɕʰu³³/ のように, 母音交替による他動詞化に加え, 使役助動詞も使われている。

8. おわりに

以上見てきたように, 他動性を示すために方向接辞に現れる母音交替は, 形態論レベルでの文法現象であり, いまなお活きてはいるものの, 生産性は限定的である。ムニャ語において, 他動性の表示は, 音節初頭子音の有声／無声の交替によって自動詞から他動詞を派生させたのが最も早い段階であり, 語彙として固定化した。ついで動詞語幹の母音交替により他動性を表示したが, 一時的な他動性を付与する形態論的な手段としては方向前接辞の母音交替が使われた。それゆえこの母音交替は, 使役文中においても現れ得る。その後, 自動詞に使役助詞 / = tɕʰu³³/ を付けた {[vi] = CAUS} が他動詞句として生成される用法が拡大したと考えられる。そのため, 例文 (37) 「凍らせる」のように, 使役文中でことさら他動性が意識された時には, 痕跡的な母音交替が出現するのであろう。こうした一過性の母音交替は, 独立自動詞を使った使役文中にも現れることがある (第4節を参照)。

- (9)′ ɲi⁵⁵ ly³³ze⁵⁵ = le³³ tɕu⁵⁵ tᵢ³³- su⁵⁵ = tɕʰu³³ ɲe³³.
 1sg.[ERG] bLo bzang =DAT 水 DIR- 満たす =CAUS DEC

私がロサンに水を満たさせた。

この使役文においては, 方向前接辞の母音交替は余剰である。こうした一時的な母音交替は必須ではなく不安定であり, もはや母音交替のみでは, 自動詞を他動詞化する独立した文法現象として機能しない。それゆえ, この文から被使役者と使役助動詞 / = tɕʰu³³/ を除いてしまうと, 他動詞文としては成立しない。

- (8)′ * ɲi⁵⁵ tɕu⁵⁵ tᵢ³³- su⁵⁵ ɲe³³.
 1sg.[ERG] 水 DIR- 満たす DEC

意図した意味：？私が水を満たした。〔他動詞文：非文〕

したがって前述の使役文 (9)′ において母音交替が起こる理由は, 「満ちる」が独立自動詞であって語彙項目には対応する他動詞が存在しないことから, 水が自動詞の主語ではなく, 動詞の目的語 (受動者) であることを示そうとして, 他動性の意識が使役動詞に先んじて表出したためであろうと考えられる。

附論1 チベット語カム方言の使役文とムニャ語

ここではムニャ語の文法における使役構文が、ムニャ語の分布域における優勢言語であるチベット語カム方言から影響を受けて発達した可能性について検討しておきたい。

以下の例文 (41) から (44) は、チベット語カム方言の典型的な使役表現である⁴。

(41) *nga kho la ja skil bcug zin yin/*

ŋa²³ kho⁵⁵=la²² dza²³ ki⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =zu⁵⁵ ji²³.
1sg. 3sg.=DAT 茶 沸か=CAUS =SFX:pft DEC [肯定]

私は彼 / 女に茶を沸かさせた。

(42) *kho bkra shis la phru gu tsho la gos bzhan bkon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² tʂhu⁵⁵gu⁵⁵ tsho²²=la²² go²²ze⁵⁵
3sg. bkra shis =DAT 子供 たち =DAT 服

ko⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =ɕi⁵⁵ do²³.

着る =CAUS =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに子供たちに服を着させる。

(43) *kho bkra shis la gos gzhan bkon shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ ko⁵⁵=ɕi⁵⁵ do²³.
3sg. bkra shis =DAT 服 着る =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに服を着せる。

(44) *khos bkra shis la gos gzhan bkon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ ko⁵⁵=tɕu?⁵⁵ =ɕi⁵⁵ do²³.
3sg. bkra shis =DAT 服 着る =CAUS =SFX:impft DEC [肯定]

彼女はタシに服を着させる。[タシは自分で服を着る]

ダワさんによると、この文は両義文で、単独で発話した場合、状況がなければ曖昧であるという。日本語の直訳も同様で、①彼女はタシに（命じて明示されていない誰かに）服を着させる。あるいは②彼女がタシに服を着させる [タシは自分で服を着る]。のどちらの意味にも取れる。もし①の意味であることを明確にするのであれば、他動詞 *gyon* /dzũ²³/「着せる」を使うべきとのこと。

⁴ここに挙げたチベット語カム方言（新都橋方言）の文例は、いずれも同地出身のダワチャシさんの提供になるものである。広義のムニャ地区で話されているチベット語方言のひとつで、新都橋はムニャ語が話されている地域の北側に隣接している。作例にあたり、ダワさんにはできるだけ自然な発話表現を選ぶとともに、口語の発音にできるだけ近いチベット文字表記も提案していただいたが、文語の綴りとは異なるため、ここではワイリー方式のローマ字転写を添えるにとどめた。発音はできるだけ忠実に音声表記し、声調は近似の高さを数字で示している。

(44)′ *khos bkra shis la gos gzan gyon bcug shun do/*

kho⁵⁵ tʂa⁵⁵xi⁵⁵=la²² go²²ze⁵⁵ dʒu²³=tʂu⁵⁵=ʧi⁵⁵ do²³.
 3sg. bkra shis =DAT 服 着せる =CAUS =SFX:impfct DEC [肯定]
 彼女はタシに（誰かに）服を着させる。

一見してわかるように、チベット語カム方言の使役文の構造は、ムニャ語の使役文に非常によく似ている。以下にその構造を提示する。

[チベット語カム方言]

(41) *nga kho la ja skil bcug zin yin/*

ŋa²³ kho⁵⁵=la²² dʒa²³ ki⁵⁵=tʂu⁵⁵=zu⁵⁵ ji²³.
 1sg. 3sg.=DAT 茶 沸か=CAUS =SFX:pft DEC [肯定]
 私は彼 / 女に茶を沸かさせた。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	V =CAUS	DEC

この構造を、上述したムニャ語の使役文 (40) と比較してみる。

[ムニャ語]

(40) ŋi⁵⁵ tʂe³³ʧi⁵⁵=le³³ tʂu⁵⁵ ti³³-ts^hu⁵⁵=tʂ^hu³³ ŋe³³.
 1sg.[ERG] bkra shis =DAT water DIR- boil =CAUS DEC
 私がタシにお湯を沸かさせた。

使役主 = 能格	被使役者 = 与格	受動者 [目的語]	方向 - 動詞 = 使役助動詞	述詞
Causer (Agent) =ERG	Causee =DAT	Patient/Object (=∅)	DIR-√V =CAUS	DEC

両者の最も大きな違いは、チベット語カム方言の動詞には、ムニャ語のような方向前接辞が接続しないので、その母音交替によって他動詞性を表わすことが構造的にできないことである。そのほか、述語部分におけるアスペクトや確認性の表示のしかたにもさまざまな違いがあるが、いずれも当面の議論には関係しない。注目されるのは、使役の各項の語順と格表示、動詞のあとに使役助動詞がつく構造には一致がみられ、しかも両言語の使役助動詞は、語順や機能はもちろん、発音もよく似ていることである。とはいえチベット語カム方言の使役助動詞 / =tʂu⁵⁵/ は、音節初頭子音が無気音であり、円唇高母音で音節末には咽頭閉鎖音がつくが、ムニャ語の使役助動詞 / =tʂ^hu³³/ は、音節初頭子音は有気音であり、非円唇高母音で音節末に閉鎖音はつかない、という違いがある。

チベット語カム方言の使役助動詞 /= $\text{t}\check{\text{c}}\text{u}^{\text{55}}$ / は、チベット文語の *bcug* から派生したもので、ラサ方言においてもやはりチベット文語に対応する同源語の使役助動詞 / $\text{t}\check{\text{c}}\text{uu}$ / *bcug* を、動詞未完了語幹のあとに付けて使役を表現する。アムド方言でもやはり同源語の動詞 / $\text{nd}\check{\text{z}}\text{ək}$ / *'jug*（現在）/ $\text{t}\check{\text{c}}\text{ək}$ / *bcug*（過去）/ $\text{t}\check{\text{c}}\text{hək}$ / *chugs*（未完了）を使う。ムニャ語の使役助動詞 /= $\text{t}\check{\text{c}}^{\text{h}}\text{u}^{\text{33}}$ / がはたして語源的にチベット文語の *bcug* に繋がるのか、あるいは西夏語の使役助動詞 /= phji^{111} / <L0749>（後述の附論 2 を参照）と関係するのか、俄かには定め難い。仮に後者だとしても、ムニャ語がチベット語カム方言の影響化で使役構文を発達させて来た可能性は否定できない。

附論 2 西夏語の使役文とムニャ語

西夏語はチベット＝ビルマ語派の古代語で羌語支に属し⁵、その言語構造の共通性から西夏語とムニャ語の祖先とは方言の関係にあったのではないかと予想される。幸い、我々は西夏文献中に見える使役構文について、翻訳のもとになったオリジナルの漢文テキストと比較対照することで、その構造を分析できる。ここでは西夏語とムニャ語の使役文の構造とその対応関係について見ておきたい。西夏語の典型的な使役構文は、以下のようなものである⁶。

(45)	5306	5604 / 5113	5525	1241	0448	1139
	𐽀	𐽀𐽁𐽂	𐽀	𐽀	𐽀	𐽀
	dzjwi	= $\text{d}\check{\text{z}}\text{ji-wji}$	$\text{z}\check{\text{ji}}$	lji	gji	= jji
	1.30	1.17 / 1.10	1.69	2.9	2.28	1.36
	皇帝	=ERG	男兒	童	一	=GEN

0960	5815	4729	4906	0749
𐽀	𐽀	𐽀	𐽀	𐽀
mjjj	tsji	lhwi	gjwi	phji
1.61	1.30	1.1	2.10	1.11
女兒	子	衣服	着る	=CAUS

【帝令童男衣女之衣】《類林》卷六 醫巫篇 29-10

⁵ 池田巧（2012）を参照。

⁶ 西夏文字の上の数字は、李範文『夏漢字典』の文字番号。再構音は龔煌城による。その下の数字は、声調（1：平声，2：上声）と小数点以下は『文海』の韻を示す。

皇帝が命じて男の子に女の子の服を着させた、という内容の文である。この例文 (45) に基づいて、西夏語の使役文の構造は、以下のように分析できる。

使役者	受動者	動作対象	述語
Causer [=ERG]	Patient [=GEN]	Object (sth.) [=Ø]	Predicate [V=CAUS]
帝	男兒	女衣	着 = せる

この文では、残念ながら被使役者 (Causee：恐らくは皇帝の命を受けた家臣) が表示されていない。注目すべきは、男兒は被使役者ではなく、動詞「着る」の受動者であり、西夏語の属格助詞でマークされていることである。

つぎに、西夏語の例文に対応するムニャ語の使役文 (作例) と比較しながらその構造を分析してみたい。

- (46) ηi^{55} $ly^{33}ze^{55}=le^{33}$ $ze^{55}=le^{33}$ $ts\check{e}^{33}\eta gw^{55}$ $t\check{i}^{33}-ngw^{55}$
 1sg.[ERG] *bLo bzang* =DAT 子供 =DAT 衣服 DIR- 着る
 = $t\check{c}^h w^{33}$ ηe^{33} .
 =CAUS DEC

私はロサンに子供に服を着せてもらった。

ムニャ語の使役文 (46) は、以下のように分析できる。

使役者	被使役者	受動者	動作対象	述語
Causer [=ERG]	Causee [=DAT]	Patient [=DAT]	Object (sth.) [=Ø]	Predicate [V=CAUS]

ムニャ語の使役文では、被使役者と受動者はいずれも対格の助詞でマークされている。同じ格表示を取っているけれども、文法的な意味は異なる：前者は使役助動詞の要求によるもので、後者は動詞の要求によるものである。この例文の意味関係の構造は、西夏語の例文 (45) とほとんど同じであり、使役者 (Causer) が能格助詞でマークされている点も共通である。逆に大きく異なる点は受動者の格表示のしかたで、西夏語の被使役者は属格の助詞 /=*jij*/ をとるのに対し、ムニャ語では対格の助詞 /=*le*³³/ でマークされている。

残念ながら西夏語の使役文において、被使役者 (Causee) がどのように格表示されるのかわかる適当なデータがないため、これ以上の議論を進めることができない。また「着せる」は3項動詞なので、その格表示との関連がやや複雑になることにも留意する必要があるだろう。今後の西夏文献の解読のなかで、さらに使役文の文例が見つかることを期待したい。

略号

CAUS	Causative auxiliary	DAT	Dative	DEC	Declarative
DIR	Directional prefix	ERG	Ergative	GEN	Genitive
impft	imperfect	IRG	Interrogative	NEG	Negative
NUM	Numeral	PCL	Particle	pft	perfect
pl.	plural	SFX	Suffix	sb.	somebody
sg.	singular	sth.	something	VP	Verb Phrase
vi	intransitive Verb	vt	transitive Verb		

参考文献

[日本語]

- 池田 巧. 2010. ムニャ語の格助詞. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. 15–28 頁.
 池田 巧. 2013. ムニャ語の述詞と文. 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：文の特徴づけと下位分類』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所. 365–390 頁.
 池田 巧. 2016. ムニャ語の名詞句. 『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』京都大学人文科学研究所. 37–55 頁.

[中文]

- 池田 巧. 1998. 木雅語語音結構の幾個問題. 『内陸アジア言語の研究』XIII. 中央ユーラシア学研究会. 83–91 頁.
 池田 巧. 2012. 羌語支語言の特徴詞：試探西夏語和羌語支的關係. 《日本東方學》第 2 輯. 北京：中華書局. 130–146 頁.
 戴慶廈. 他. 1991. 《藏緬語十五種》北京：燕山出版社.
 格桑居冕, 格桑央京. 2002. 《藏語方言概論》北京：民族出版社.
 黃布凡. 1985. 木雅語概況. 《民族語文》1985 年第 3 期.
 黃布凡. 2009. 《川西藏區的語言》北京：中国藏学出版社.
 孫宏開. 1983. 六江流域的民族語言及其系屬分類—兼述嘉陵江上游, 雅魯藏布江流域的民族語言. 《民族學報》1983 年第 3 期. 昆明：雲南民族出版社. 99–273 頁.
 孫宏開. 他. 2007. 《中國的語言》北京：商務印書館.

[English]

- IkEDA Takumi. 2003. On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of Tibeto-Burman Area*. 25.2. University of California, Berkeley. pp. 27–45.
 IkEDA Takumi. 2007. Exploring the Mu-nya people and their language. *ZINBUN*. 39. Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp. 19–147.
 IkEDA Takumi. 2008. 200 Example Sentences in the Mu-nya Language. *ZINBUN*. 40. Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp. 71–140.
 IkEDA Takumi. 2013. Verb predicate Structure in the Mu-nya language. Paper presented for the 3rd Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan, held on September 2nd–4th of 2013 at Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.